



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 9 号

令和2年12月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

土呂中生の「表現」

校長 富田 敦

周りから似ていると言われる姉妹だが好きな事は正反対だ 鈴木 日菜（1年生）

この短歌は、さいたま市子ども短歌賞で優秀賞に選ばれました。作者（鈴木さん）の気持ちがストレートに表現されていて、読者に「自分も同じような気持ちになったことがある」という共感を覚えさせてくれる秀歌です。鈴木さんは、この歌を詠んだ時の気持ちを振り返って話してくれました。

「私は土呂中学校に入学したとき、先生や近所の人に『3年生のお姉さんとよく似ているね』と言われました。『似ている』と言われることは、うれしいんです。姉は硬筆や書初めの字も上手で絵も上手、私にとって憧れの存在であり、目標でもあるからです。でも、私と姉は違うのです。姉は読書が好きなのですが、私は本よりテレビが大好きです。姉はピアノが上手ですが、私ほうまく弾けません。同じ音楽部に入っていますが、姉はトランペットで、私はクラリネット。好きなことが同じならば、もっと共感しあえるのになあ、と思うこともあります。実は、家で姉妹げんかもよくします。手を洗う順番、お風呂に入る順番など、ささいなことでもけんかになってしまいます。でも、次の日にはお互いケロッと忘れてしまいます。この短歌を作るにあたって、自分の素直な気持ちを表したいと思いました。『なんで似ているって言われるのかなあ。性格や好きなことは違うのに…。』こういう気持ちを周りの人に伝えたいと思って表現しました。憧れである姉に追いつきたい。私は負けず嫌いなので姉を目標にする。このような気持ちも込めた短歌です。」

短歌は別名「三十一文字（みそひともじ）」とも言われ、「五七五七七」の31音で創られます。鈴木さんの短歌は、この定型にこだわらずに【破調】伸び伸びと自分の気持ちを詠みました。「素直に気持ちを表現したら型にはまらなかったのでしょうか。」と1年国語科 日吉 史生 教諭は笑顔で言います。

さて、土呂中学校の科学部の研究がさいたま市、埼玉県で最優秀賞を得て、全国展へと進みました。約1年前の「見沼のほとり」で 神原 航輝 部長が「令和元年度は全国展へ行けなかったのが、今年は全国展に推薦される研究をしたい。テーマを掘り下げた研究にする。」と述べていました。見事、目標達成です。

神原部長「埼玉県最優秀賞、全国展出品という目標を達成して素直にうれしいです。今回の研究は、『仮説を立て、1つの実験をし、その結果を考察し、次の実験を考える、という過程を積み重ねました。昨年度、一つ一つの実験をつぎはぎしたような印象を受けたと、選評されたことを受けての取組です。』今回の研究テーマは『復活せよ、僕らのビオトープ』。校内にあるビオトープの水質をよくするために微生物を活性化させると仮説を立て、様々な実験を繰り返しました。多くの実験をし、たくさんのデータを取り続け、部員みんなが考察し、議論を続けました。こうして実験のやり方も改善し、研究の質が上がったと感じました。一人ではとても処理しきれない量のデータを得ることもできました。研究を進める中で、他の部員と予想をしたり考察をしたりすることは本当に楽しかったです。部員みんなが研究に取り組むことはとても充実感がありました。いい部員に恵まれました。最後に研究をまとめる際には、今年の研究は全国に行けるという実感ももてました。」

神原部長は今後も環境問題に関心を持ち続けたいと話してくれました。「答えが1つではない課題について、よりよい答えを導き出すために一人ひとりが知恵を出し合い、それをみんなで考察していく」という活動は今まさに、日本の教育界が求めている教育活動です。目標に向けて取り組み続けたことと合わせ、このような活動に取り組んできた神原部長をはじめとする科学部員を誇りに思います。

コロナ禍の2学期もあと3週間あまりです。土呂中学校では新型コロナウイルス感染拡大防止マニュアルに沿って毎日の検温確認、換気、消毒などを継続しています。例年行われてきた冬季体育大会は中止となりましたが、修学旅行は3月4～6日に実施する予定です。